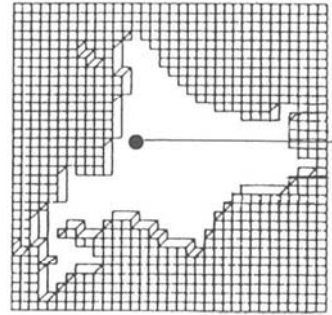


連載



あのマチ・地域おこし活躍中 このムラ

No.9

北竜町の事例

地域の概要

今や、ひまわりの町として全国的に知られるようになった北竜町。NHK朝の連続テレビ小説のタイトルバックにこの町のひまわり畑が映しだされた影響も大きかったであろう。だが、この町で注目されるのはひまわりばかりではない。

この町は、これまで有機農業による米づくりや営農集団の成功などで大きな注目を集めてきた。

本連載では、これまで当研究所が地域振興計画に関わった市町村を紹介してきたが、今回はやや趣向を変え、本誌第5号と第15号の特集で登場した北竜町を、地域おこしの視点から紹介しつつ、その成功の秘訣を探ってみたい。

北竜町は、空知支庁管内の北西部、石狩平野の北部に位置している。石狩川の支流である雨竜川と暑寒別岳の間に広がる平野部と山間部からなり、町の面積の約七割が山林である。

気候は、海洋型と内陸型の間的な性格で、夏の平均気温は19℃に達し、道内では比較的高温多照である。冬の平均気温は-8℃で、積雪量は平野部で1・5m、山間部で1〜2mになる。

人口は約三、〇〇〇人。世帯数約九〇〇のうち農家戸数は約四〇〇の純農村である。

北竜町農業の概要

北竜町の全耕地面積は約三、一五〇ha。昨年度の農畜産物販売高

は、約四〇億円。作目別の内訳は、表1に示した通りである。

すなわち米が耕地面積で全体の約七二%、販売額でも全体の約八二%を占め、基幹作物となっている。その他に作付けされている主な作物としては、小麦、豆類、雑穀、メロン、そしてひまわりがあげられる。その中で、小麦や豆類は近年その割合が低下しており、逆にメロンを中心とする野菜は、割合が高くなる傾向で推移している。

ひまわりによる町おこし

農協婦人部の

ひまわり普及活動

北竜町とひまわりの出会いは、一九七九年に行われた農協の海外

視察であった。当時営農部長であった四辻進氏は、旧ユーゴスラビアで目にした一面に広がるひまわり畑の美しさに魅せられ、帰国後、ひまわりが食用油の生産など産業の面でも町おこしに役かっていることと共に報告した。これをきっかけに、翌八〇年、農協婦人が食生活改善運動や自給運動の一環として、「ひまわり油自給運動」や「一戸一アール運動」を開始した。同年農協は、自費で搾油機を購入。八二年に、町はひまわりを町花に制定した。

その後ひまわりの作付けは増加し、八八年には約七〇haと全国一の面積に達した。この間、ひまわり油のみならず、ひまわりの種を用いた製品が次々と開発され、さらにひまわりの絞り滓は、町オリジナルの有機質肥料「ひまわりヘルシー」の原材料として利用されている。九〇年には、「北竜町ひまわり高度利用検討委員会」が設置され、北海道開発局の協力も得ながら、ひまわりを利用した製品開発や薬理効果についての研究が進められている。

老若男女一丸の「ひまわりまつり」

八七年に、それまで町内で行なわれていたいくつかの祭を統合した「ひまわりまつり」が初めて開かれた。これは農協青年部が栽培したひまわり畑「ひまわりの里」を中心に開催される。七月下旬のオープンングセレモニーに始まり、町づくりグループ「竜トピア」による「ひまわり迷路」、ハーフトラソン、コンサート、盆踊り大会など、一カ月間に次々と行われる。また「ひまわりの里」のすぐ近くの北竜中学校では、九一年から世界中のひまわりを五〇種類も栽培・展示している。この時期、中学生達は夏休みであるにもかかわらず、観光客の案内や駐車場の整理などを行い、その働きぶりは親達に負けていない。

ここから少し離れたところには温泉、レストラン、ショッピングセンター、ホテルの機能を備えた「サンフラワーパーク」がある。もちろん観光客もやってくるが、

平日頃から、町の人々の憩いの場であり、社交場となっている。

今年度の「ひまわりまつり」は二万人もの参加者を数え、ひまわりを中心とした地域おこしは、大変な盛り上がりを見ている。

有機農業による町おこし

農協青年部の消費者交流 と有機農業の取り組み

北竜町における有機農業の取り組みは一九七三年から見られる。

はじめは、当時の農協組合長後藤三男八氏と現・農協組合長黄倉良二氏による極くわずかなもので、その後しばらくは地道な取り組みが続く。だが、八〇年代後半の青年部による消費者交流活動をきっかけに全町的なものになっていく。青年部は七九年から毎年、町内消費者との交流会を行っていたが、八六年から交流の範囲を広げ、コープさっぽろとの交流・PR活動を通じて消費者が安全な農産物を求めていることを認識するに至った。九州グリーンコープとの交流

も八七年から始まり、八八年から無除草剤米による提携が行われている。

こうした消費者との交流は、青年部を中心に、生協や米穀業者で構成する「いのちとふれ愛のネットワーク」という組織に発展した。

そして八八年の農民集会では、それまでの農民集会が米価引き上げを中心課題としていたのに対し、農協青年部の提案により「安全な食糧生産に関する決議」が採択された。またこの年は、自然農法米生産組合も結成された。

八九年には「ひまわりヘルシー」の供給と、全町的な有機栽培米の作付けが始まり、これは「ひまわりライス」などのように、生協や業者毎に独自の銘柄で販売されている。

翌九〇年には、「安全な食糧の生産」という内容を盛り込んだ農業委員会憲章や土地改良区宣言が出され、町議会では「国民の命と健康を守る安全な食糧生産宣言の町」が宣言された。こうして、町をあげて有機農業に取り組み体制がつけられていった。

広さから深さへ

表一に示すように、北竜町の有機米にはいくつかの栽培体系がある。そのうち、最も割合の大きい「有機栽培米」は、これらの中で最も慣行栽培に近い内容である。

だが農協では、九三年に乗用除草機を導入し、無除草剤米の労力軽減を図っている。また農協青年部では、九四年より有機・無農薬大豆、九五年より有機・無防除米に取り組んでいる。このように北竜町では、有機農業の広がりだけでなく、質的な深化も図られていく。

そして、北竜町における有機農業の取り組みを知り、新規就農や研修を希望する者も多数現われている。

表一 北竜町における主要農産物の生産・販売状況（1995年度）

品目	面積 (ha)	金額 (千円)
米	2,266	3,246,667
小麦	54	16,144
大豆	141	72,665
雑穀	103	20,399
メロン	56	363,277
かぼちゃ	13	8,298
スイートコーン	9	6,967
すいか	6	79,522
ひまわり	47	4,865
その他畜産物	455	48,648
		127,258
合計	3,150	3,994,710

註1)北竜町農協資料より作成。
2)米の販売金額は94年産持ち越しを含む。

